

中学生

国内機関長賞

「夢を叶えるために」

帯広市立帯広第二中学校

両金 菜奈さん

私には大きな夢がある。それは青年海外協力隊になることだ。そして国の壁を越えて仕事がしたい。

今年の夏休み、元青年海外協力隊の方と話す機会があった。協力隊の方に「一番印象に残っていることは何ですか？」と尋ねたとき、私にとって一番印象的だったのは、貧しい中でも「ないからこそ、与える」ということだ。なぜ自分を支えていくだけで大変な人たちが、他人に物を与えたりすることができるのだろうか。

この例に、協力隊員の話の中にあるひとつのパンの話があった。彼がウズベキスタンである家族を訪れたときに、その家のお母さんがこう言った。「今日のご飯はひとつのパンしかないけれど、みんなで分けて食べましょう。」彼はその家には病気のおばあさんがいることを知っていた。だから彼には“自分は気にしないで食べてもらいたい”という気持ちと、“本当の家族だと思い、分けてくれるその温かい気遣いを受け取りたい”という二つの気持ちがあった。こんな気持ちを持った彼は、断れなかったそうだ。そして彼はパンを食べて、その家族に「ありがとう」と伝えた。その家族は彼が受け取ったことに喜んだそうだ。自分達は十分に食べられていないのに、なぜ喜ぶことができるのだろうか。この話を聞いた時、私は自然に涙が出た。そしてこの話を聞いて、私の中で変化したことがある。それは、お金＝幸せ、ではないということ。このことに気づけなかったのはきっと安全で裕福な国に住んでいるからだと思う。そのとき自分の愚かさを痛感したし、勝手な基準で彼らについて判断し、可哀相だと思った自分を恥じた。

貧困な国に住む人々は、少ない食料をみんなで分けて食べる。裕福な国に住んで、私が今忘れかけている小さな幸せでも心温まることができる彼らが羨ましいと思う。そんな彼らは人のすべてを包み込み、おもてなしの心を大切にしているからこそ、あんな風にパンを与えることができるのではない

かと思う。

でも、やっぱり彼らを貧困から救ってあげたいという気持ちが私の中にある。途上国と日本、決して近い国ではないけれど、今そこに住む人達のために、私ができる事は何か。協力隊の方と話して、自分が今やるべき事が見えてきた気がしている。それは彼らを見習い、彼らが人を温かく包み込むように、私自身も多くの人の支えになっていきたいと思っている。それが私の夢を叶える第一歩にもなると思っている。そしていつか必ず、私は彼らと心がかよわせることができる、協力隊員になりたいと思っている。